
東方守殺夢

口リ鬼畜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方守殺夢

【Nコード】

N8961Y

【作者名】

ロリ鬼畜

【あらすじ】

東方の二次創作小説です。

内容は戦ったりグダグダしたりギャグったり死んだり殺したりシリアスだったりなど自由（ここ重要）

過激な性描写などは描いていいのか迷っていますが作者がもっぱら変態なのでどうなるかは知りません。

あとネタが多いので時々カオスになります。（ここも（重要）

内容は転生だったり、幻想入りだったり主人公チートだったりしません。

主人公はそんな極端に強くは無いですが、原作で言うところの霊夢と同じくらいの強さ。

更新回数は多くなるかどうか分かりませんが頑張ります。

守殺夢

世の中には、どんなに頑張っても理解出来ない物事があるものだ。
例えば、そう、今の私の状況とか。

どうしてこうなった……！？

今、私が頭の中で思った言葉は、おそらく人類で最も凡用性の高い
言葉ランキング（2011年11月11日現在）の10位ぐらいに
食い込んでくるほど使いやすい言葉だろう。（1位は「なんじゃあ
ああこりやあああ！？」）

とりあえず、今は考えるより先に体を動かすべきだと私の脳から命
令が発信されたのだろう。私の額はこの世のどんな飛行物体より早
く……その男の顔面に放たれた。

「ひでぶっ！！」

殺して、守って、守り切った。

——夢——

東方守殺夢 第一話 「守殺夢」

肌寒くなってきた秋晴れの空の下を私は「彼ら」とゆっくりと歩む。
「彼ら」曰く、急いで歩いているらしいのだが、全くを持ってスピ
ード感や素早さは感じられず、ただただやる気のなさだけが一目瞭
然で感じられるほどゆっくりだった。

まあ、妖怪って言うのは昔からのんびりすぎる生き物なんだろう。
……急いでるのならさっさと飛べばいいのに……

心の中では軽く突っ込みを入れてみるものの、もちろん口になど
出せない。相手は妖怪だ、少しでも機嫌を損ねたらそこで私の方が
天国へと飛び立ってしまうかもしれない。

会話もない気まずい空気の中、暇だったのでそんな事を考えてい
ると、やっと一人が口を開く。

「……何でだ……何故頭突きなんだ……」

「す……すみませんでした」

真っ黒な私の髪の毛とは対照的に真っ白な髪の毛を揺らしながら、
男は急に立ち止まりこちらを振り向く。そして私はこの男に「白髪」
というあだ名をつけよう。

「いや、いいんだよ別にそんなに謝らなくても、むしろ悪かったの
はこっちなんだしねー（棒）」

……嫌だもうこの人、感じ悪い。

初対面なのにここまでム力つく態度をとってこられるのはおそろ
くこの人と私の妹ぐらいだろう。こんな人が命の恩人だなんて……
こんな人に助けられたなんて……。

人は困ったととりあえず助けてとSOSを出す生き物である。だ

からこそ生まれてくる子供が親を選べないように……誰に助けられるかは助けられるその瞬間までわからない。

とんでもない変態に助けられたとしても文句は言えないのである。「何故だ……何故キスをしようとしただけで頭突きなんだ？……そうか、木に縛られていたせいかな、初対面でいきなり過激なプレイは嫌だったのか……なるほど」

ブツブツと恐ろしく常識のないことを呟いているが無視していいのだろうか？てゆうか他の二人は何で普通に歩いているんだろうか、こんなことが日常茶飯事なのだろうか？

てゆうかこの人達は誰なんだろう？

「なあ……香織？」

「何？切」

「なんであの娘は俺らについて全く警戒してねーんだ？つーか俺らが誰だかくらい気にしろつーの」

「知らないよ、ならアレやる？」

「ワイワイ、マジかお前……アレは失敗したら終わるぞ？」

「まあまあ、一か八かって事で、物は試しつて言うじゃん！ー」

「仕方ねー……お前がそこまでいうなら……」

二人はボソボソと数回の会話を交わした後、白髪の男が会話に参加していなかったもう一人の耳元でささやく。

……あのー、ぶっちゃけ全部聞こえちゃってるんですけど……。

ここは気づかずにいてあげるのが大人な対応とでも言うのだろうか？とりあえずここも無視する。

「キヤータスケテー」

……え？

いきなりピンクの髪のアホ毛の少女がしゃがみ込んでもがき始めた。よし、この少女には「アホ毛」とあだ名をつけよう。

「大丈夫か？どうしたんだ！？」

と思ったら横から白髪がアホ毛の様子を伺い始める。

「ワルイヒトタチニオワレテイルノ！」

そして何でこのアホ毛は片言なんだろうか、下手な演技はともかくそっちの方が気になる。

「なんだって！？それは大変だ！お兄さんが助けてあげよう！！」

白髪がそう叫ぶと（棒読みで）白衣を来たさつきまで全く会話に参加しなかった最後の一人が動き始める。じゃあこの女性には「白衣」と命名しよう。

「あーロリコンだー！！」

「え？ち、違うんだ！えーっと……もう！！オリヤツー！！」

白髪が白衣に右ストレートを放つ（厳密に言うとう当たっていない）、当たってもいないのに白衣が倒れたフリをする。そしてアホ毛が殴られた音を手拍子で再現する。が、下手なんだろう、パチインとしか音がしない、人を殴ってそんな音がする訳もない。……が大人ならきつと氣遣ってスルーするのが当たり前なんだろう、あえて突っ込み入れない。

「ワー、アリガトウ、オニーサン、デモドウシテワタシヲタスケテクレルノ？」

「ふふふ、それはだな……この俺が……」

白髪、アホ毛、白衣の三人が集まって白髪を真ん中にしてアホ毛が右側、白衣が左側になってそれぞれポーズを決める。

「守殺夢だからさー！！」

秋の肌寒い風は落ち葉を巻き込んでびゅうびゅうと吹き荒れる。

その風の音と共に「彼ら」三人の言葉が魔法の森に反響する。

そして「彼ら」は円陣を組んでボソボソと話し始める。

「やっぱりダメだったじゃねーか……なんかあの子めちゃくちゃびつくりしてポカーンってしてるぞ……」

「やっぱり切の考えがダメなんだよ、何で決めポーズがギニュー特戦隊のヤツなの……人数が三人しかいないのに無理に決まってるじゃん……」

「うつせ黙れギニュー舐めてんじゃねーよ、じゃあなんでお前はカタコトなんだよ？」

「いや、ほら……私は最近幻想入りしたばかりのまだ何色にも染まっていない美少女っていう設定で……」

「仮に幻想入りした設定でもカタコトにはならねーだろ！普通に言葉通じるから……あと花梨、俺ロリコンじゃねーし！」

「……あら？そうかしら、たった数分前までその少女に欲情していた男が言えるセリフかしら？」

うん、さつきから突っ込みたい内容の会話がどんどん聞こえてくるけどあえて突っ込みは入れないようにしよう、なんだか今日一日だけで私の人生の中で登らなければいけない大人の階段を半分ぐらい登った気がするけど。あと、私みたいな今年でもう14歳なのに身長が140しかないよく小学生に間違えられる中学生に欲情している時点でロリコンです。

けど……しゅ、しゅさつむ？ずいぶんと言い難い言葉だ、頭の中で再生しただけでも噛んでしまいそうになる。

……これ噛まずに言えるかな？

「しゅさつむ、しゅさつむ、しゅさつむ……よし、三回言えた」

私が早口言葉の練習を兼ねて小声で三回つぶやくと「彼ら」はすぐに反応を表した。まず、白髪の男が消えた、一瞬でどこかに消えて居なくなってしまった。さらに背後に誰かの気配を感じ、振り向く。

「お嬢ちゃん『守殺夢』に興味があるのかなあ？」

耳元で誰かにささやかれ、振り向くとそこには白髪がいた。私の耳の高さに合わせてしゃがみ込みささやいていたのだろう、振り向くと顔がすごく近い、おそらくセンチぐらいしか私の顔と白髪の顔の距離は離れていないだろう。流石に空気を読んだのか立ち上がつて話を

続けようとする。座ってるままではあまり気づかなかったがこの白髪、中々の高身長である。180くらいあるんじゃないだろうか？

「漢字で言つと「守る」っていう字の「守」をしゅ、「殺す」って
いう字の「殺」でさつ、「夢と希望」の「夢」でむ、合わせて読ん
で「守殺夢」って訳だ」

……守殺夢……

分らない言葉は辞書などで調べるのが基本だ、しかし今ここには
辞書はない。辞書の代わりになるものしかない。しかし、まあ辞
書より答えは早く見つかるだろう。

「あの、守殺夢って……なんですか？」

私がそう問いかけると、白髪は嬉しそうに……私の問いかけを待
ち望んでいたかのように……ゆっくりと口を開く。

「知りたい？」

ああ、もう回りくどい。てゅーかい加減ウザい。

さつさと説明しろとまた頭突きを繰り出そうとも考えたが流石に
自重した。

「俺らみたいな殺すことしか取り柄のないようなクズ共の継ぎ接ぎ
でできた文字通り「殺して守る」組織、それが俺達『守殺夢』だ」

いきなりさつきまでは全く感じなかった寒気が私の背筋を震え上
がらせる。殺して守るなんてただの殺人鬼と変わらないじゃないか
と心の中で突っ込みを入れるもののこんどばかりは大人の階段がど
うこうじゃ済まない、殺されるかもしれない。他の二人の視線が自
然と心地の良いものには感じられなくなった。そしてこの白髪の言
う事が本当なら……私は、殺されそうになったところを殺人鬼に助
けられたのだ。

「お前も知ってるだろ？四季映姫とかいう幻想郷のロリ閻魔を、そ
の人に俺達は生きながら警告されたんだよ、このままじゃお前達は
地獄に墜ちるだけじゃ済まないって、だからこうやって今は守る立
場にある訳、……難しいようにも聞こえるけどこうやって働いて人
助けをして罪を償ってるって訳」

聞いたことがある、いるらしい、極稀に。生きながらにして閻魔
に目を付けられているイツちゃてる奴らが。それがこの『守殺夢』

だっ たん だろ う。

「俺らの仕事を良く言えば『警察』……悪く言えば『殺し屋』かな」
白髪は笑っていた、何が楽しいのか、何が面白いのか笑っていた。
その不適な笑顔にさっきまで私がこの男に抱いていた不満はもうない、あるのは彼から感じられる抑えきれない殺意と恐怖だけだった。

「行くぞ、お前等。今日の仕事は久々に戦えるヤツだ。もう人探しとか物探しとか言う地味な仕事じゃない、その証拠に今日は守殺夢全員での出勤になってる……全員で三人しか居ないけどな」

アホ毛は何を思ったのかポケットから万年筆を、白衣もポケットからカプセル薬を数個取り出した。そして白髪は右手の袖から、刀の刀身をすうーっと出現させた。

「さあて、久しぶりに楽しくなりそうだな……」

白髪はそう呟いて刃の先を空に向かって仰いだ。

第一話目終了。

東方の二次小説の癖に第一話の時点ではほとんど東方についての話題が出ていない件には触れないでくださいww

実はこの小説、昔アメーバブログでやっていた小説の改良版だったりする、本格的に書く為にこっちに来ました。

基本趣味で書いているので正直更新頻度とか、一話あたりの文字数とか決まってるません。

こんなんでも良ければ東方守殺夢、どうぞご覧あれ。

そして何気に11月11日11時11分11秒投稿したつもりです、
電波時計見ながらなので多分合ってるはず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8961y/>

東方守殺夢

2011年11月26日22時51分発行